第３７回全国中学生人権作文コンテスト愛知県大会名古屋ダイヤモンドドルフィンズ賞

かわいそうな子

西尾市立寺津中学校三年　渡邉　茉生

「かわいそう」これは私が何度も言われた言葉です。私には生まれた時から手の指がありません。足の指は小さく，爪がなくて小さい頃に手術をした跡が両足に残っています。その事で苦労する事がいくつかあります。指が少ないので鉄棒や跳び箱のように体を支える運動が苦手です。だけど毎日公園で逆上がりの練習をし，手がマメだらけになって何度も「もう無理」と思ったけど，諦めずに練習を続けていたら出来るようになりました。跳び箱は三段しか跳べないけど，手に力を集中させて台上前転は出来るまでになりました。出来るまでにみんなより時間がかかるけど，もう一つ，楽器の演奏も工夫が必要です。ピアニカはみんなと同じ指使いではどうやっても弾けないので「ドレミファソラシド」と弾く時は「ファ」を小指で弾くなどとして工夫しています。リコーダーは私の指に合わせて穴の位置をずらし，穴がふさぎやすいようにクッションを付けています。障害があることで，みんなとは違う指使いやリコーダーを使っているけど少しの工夫でみんなと同じ様に演奏が出来ます。

障害があることで嫌な経験をたくさんしました。

「ほらほら，あの子。指のない子。」

と指を差してヒソヒソ言われたり，

「見せて。」

と，いきなり腕をつかまれた事もあります。そんな時，私は何も言えず家に帰ると悔しくて悲しくて辛い気持ちを我慢出来ずに泣いてしまいます。近所の公園で会った上級生に

「指がないなんて絶対イジメられるよ。かわいそう。」

と言われたり，手を見て

「うわー痛そう。かわいそう。」

と言われた事は何度もあります。ある日，遊園地で兄とアトラクションの座席のバーを持って動くのを待っていたら，安全確認に回ってきたスタッフに突然大声で

「その手！ちゃんと握れるの？」

と聞かれました。周りの人にこっちをジロジロ見られ，下を向いたまま

「大丈夫です。」

と小さい声で答えると

「どうしたの？けがしたの？かわいそうだね。」

と言われたので「何でこんな所に来てまで，そんな事言われないといけないの？」と心の中で叫んでいると，隣りにいた兄が

「茉生はかわいそうな子じゃありません！僕より何でも出来るんです！」

と言ってくれました。私はその言葉に「ハッ」としました。たくさんの人に「かわいそう」と言われ続けて，自分自身も「私はかわいそうな子。それは仕方ない事。」と諦めるようになっていました。しかし兄の言葉で「私はかわいそうな子じゃなくていいんだ。」と思えるようになりました。兄だけでなく，私を助けてくれる人はたくさんいます。その人達

に一度も私は「かわいそう」と言われた事はありません。障害があると不便な事があるのは事実です。人より努力と工夫が必要です。しかし私にとって一番の障害は指がない事でも爪がない事でもなく「心ない言葉」なんです。今まで出来ない事があると「指がないから仕方ない。」と思っていたけど，兄の言葉で「今まで以上に頑張ってみよう。指があっても出来ない子もいる。みんなと同じ。」と前向きに考えられるようになりました。

私の事を「かわいそう」と言う人は，私を傷付けようとして言ったわけではないのかもしれません。私の事を本当に心配して言ってくれた人もいたのかもしれません。だけど，人と違うからといって「かわいそう」と言うのは知らない間に相手をとても傷付けている事を知って欲しいです。「かわいそう」と思うのではなく「頑張ってるな。」と思って欲しいです。音楽も体育も上手くはないけど，人より苦労しながら工夫して頑張っています。悲しい時もあるけど，みんなに支えてもらいながら頑張っています。私は「かわいそうな子」ではありません。人より少しだけ「頑張れる子」です。